

栗本薫

ROMANEO SPECIAL
書下ろし

伊集院大介VS栗本薫

猫目石下

乱歩賞SPECIAL
講談社
ノベルス
KODANSHA NOVELS



猫目石〔下〕

昭和五九年一月五日第一刷発行

KODANSHA NOVELS

定価六八〇円

著者——栗本 薫

©1984 KAORU KURIMOTO Printed in Japan

発行者——加藤勝久



発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二 郵便番号一一二 電話東京(〇三)―九四五―一一一(大代表)
振替東京八―三九三・〇

印刷所——大日本印刷株式会社 製本所——大口製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。

猫目石〔下〕

栗本 薫

KODANSHA 講談社 **NOVELS**
ヘルス

ブックデザイン——市川英夫
カバーイラストレーション——福田隆義
本文イラストレーション——福田隆義

目次

第一章	迷路	7
第二章	真夜中のシンデレラ	55
第三章	夏の終わり	103
第四章	麻衣子のために	151
エピローグ		205

第一章 迷路

1

と、いうわけで――

ぼくはぼんやりと、エンピツのしんをかみながら物思いにふけていたのだった。

ぼくは、けさ、軽井沢から帰ってきたところだった。

あすは、青山でとり行われるという、藤波武子女史――故・藤波武子女史の告別式に出なくてはならない。そのことを考えると、いまから気が重いのだ。

電話は、とつくに毛布とザブトンにくるんで押入れに放りこんでしまっていた。五連続殺人というだけでも、いいかげん殺人や血なまぐさい事件に食傷した奥さまが

たの目をさえひきつける迫力はあるのに、犠牲者のひとりには落ち目とはいえ美人女優で、もうひとりとは人気No.1の売れっ子女流大作家である。藤波女史はことに主婦に人氣があった。まったく、向田邦子の飛行機が落ちたとき以来というさわざになっても、ちっともふしぎはなかった。

そこへ、居あわせたのが《英ちゃん》に一条司郎に朝吹麻衣子の家族に、大したことはないとはいえ栗本薫氏に「日本のホームズ」伊集院大介とそのワトスン、森カオルのコンビとあつては、もう四年に一度のオリンピック、みたいなものである。

山科さんが車を手配してくれたおかげで、報道陣や何とかレポーターのたぐいにもみくちゃにされることもなく、家まではぶじに戻りつけたけれども、帰ってみると東京は地獄のように暑いし、あすはどうあっても告別式に出て、ハゲタカの如きマスコミのえじきにされねばならないし、じっさいげんなりすることばかりだった。

しかし、これでも作家のはしくれ、それにあれだけの

かわりがあったからには、女史の告別式をスッぽかす度胸はぼくにはないし——となると、気の弱い男の行きつく逃げ道はたったひとつ、酒である。

そこで、ぼくはマンションのカギをしつかりかけて、昼ひなから、酒びたりになっていたのだった。

しかしむろん、すっかり何もかも忘れてしまうというわけにはゆかなかつた。たてつづけにみた死体が目にちらつき、何よりもまずいのは、伊集院大介のことを考えてしまうことで——

（伊集院大介は、いまごろのんだくれてなんぞいないんだろうな。——森力オルをあいてに、緻密な推理の見直しをしたり、アリバイくずしでも考えているのかもしれない）

そう思ってしまうので、ぼくの心はいつこうにやすまらないのだ。

別に、ぼくは、何度もうのように、自分のことを名探偵だ、などとは夢さら思っていないけれども——しかし、事実上、伊集院大介とぼくとでは、条件はまったく

同じ——いや、明らかに、ぼくの方が少し上まわっているのである。ぼくは、麻衣子とヒロの話や、宗像とみゆきの話をきいていたし、それに伊集院大介よりずっと前から女史の別荘に滞在していたのだから。

それなのに、伊集院大介にはわかつていて、ぼくにはわからないことがもし、あるのだとすれば——

五日間に五つの殺人。

一番はじめ、浮浪者が殺され、二番目に暴走族の少年。三番目は暴走族の襲撃があつて、四番目に三人。もつとも、さいごの一つはすでに別の事件というべきかもしれないが。

パーティーに合わせた十三人の客と主人。

十三……

どうやったら、体面を失することなく、あしたの告別式をとんずらできるか？

いっそぼくが、六番目の被害者になつてしまえば……
麻衣子。

麻衣子とうらはら東京にいた。

突然、心痛のあまりひどい熱を出して、というのはどうだろう？

く、くにおふくろが頓死して、というのは？

ダメかな。ダメだろうな。

唯一、いいことがあるとすれば、麻衣子に会えることが――

しかしそれももうおしまいだろうな。あの映画も当然お流れだろうし、もう女史のいなくなってしまった今、天下の大スターとかけだし作家をつなぐ糸は何もなくて……

どうやらぼくは本当に朝吹麻衣子を好きになってしまったらしい。ぼくより十二、年下の、父親はベテンスーで母親は霊媒で、姉は？で兄は暴走族、という少女を。

しょうがない。これからはせいぜい、麻衣子のブロマイドでもあつめるさ。それと「平凡」の記事の切りぬきと――麻衣ちゃんの好きな色はあわいピンク。おやすみのときはいつも大好きなスヌーピーといっしょです。

だってまだ麻衣子十六なんですもの。

紫の上。

浮浪者。暴走族。落ち目の女優に編集者、流行作家。

「そして誰もいなくなった」か、「ABC」か「オリエンタル急行」か。それにしてもどうして、ぼくはパターン認識でしか、ものを考えられないのかしら？

伊集院大介なら……

十三人の客と主人。三人が死んで、十人になあつた。

あと十人死ねば――「あとにはだあれもいなくなあつた」だ。

じゃ、のこりの二人は、おまけつてわけか。おまけつき連続殺人。グリコだな。

しかしどちらにせよ、探偵合戦をうけて立ったわけじゃないのか？ ぼくがどうして、そんなことを考えなくちゃいけないのか？ この件には、ちゃんと伊集院大介という名探偵がいるんだし、ワトスンもいる。

するとぼくの役どころは？ 「ニッポン探偵」のテリー・リング、あのバカなタフな私立探偵か、「アクロイ

「ド殺し」のシェパード医師か、それとも——イジドール・ポートルレ少年かな？　ベイカー・ストリート・イレギュラーズか？　それともまぬけのグレグスンか、大鹿マロイか。

ほら、また、パターン認識だ。

ぼくが新しい一杯をつくりはじめたとき、突然ベルが鳴り出した。

さてはベルゼブルかアスタロトがぼくをつれに出現したか、と見まわしたが、それは何のことはないインタホンだった。チェ——誰かが、ここまでかぎつけて攻めてきたのだろうか？

布団をひつかぶって息を殺していることもできたのだが、ぼくは何者ならんとまずのぞき穴からのぞきにいった。もしナシモトだったらドアのすきまからイペリット・ガスを放出してやろう。しかし、のぞいたとたんにはぼくはあんまりあわててチェーンを外しにかかったので、指をはさんでしまったくらいだった。

ドアをあけると、奇怪な風体ふうていの人間がそこに立ってい

た。

年のころは三十なるならず——のはずだが事実上不明、顔じゅうヒゲだらけ、ぼうぼうの長髪にインドふうシャツとズボン——いまだき珍らしい正統派ヒッピーか下痢のキリストか、どっちか、というくらい、電信柱のようにはやせてひよろりとして、ほおのこけた——

「ワオ！　信！」

ぼくは、やにわに、長年の第一等の親友の胸に抱きついていた。

「なんて、いいタイミング——やっぱし、テレバシーかしらん。生きてたのかよッ」

「はい、薫」

おちつき払って、石森信は云った。

「なんか大変だったらしいな。——なんだヨ、お前、まっぴるまから、もう酔っ払ってんの？」

「もう、やめるよ」

ぼくは信をつかまえて、ひとくさり「スリラー」の一節を踊ってから、信をへやにひきずりこんだ。

「下に、なんか車がとまってたヨ」

信がいったのは、カギをもとどおりかけ直してからだった。

「カメラとテレコ持った奴がのつてたけど——何かやつたんか、お前？」

「冗談じゃないよ！——まあ、とにかく、きいてくれよ。ぼくももう、ほんと、疲れちまって……」

「そのまえに、何か、食いもん、ないか」

信は云った。

「やっぱし、断食は性にあわん」

「——と、まあ、大体、こういういきさつだったんだけどさ」

一気にまくしたておわって、ぼくはほんと深い息をついた。

もしかして、ぼくに必要だったのは、ひとに話すことで考えをまとめ、気をおちつけることそのものだったの

かもしれない。話しおわると、もう酔いも半ばさめていたし、気分もさつきまでとは、ぜんぜんちがっていた。

「ふーん。そら、大変だったな」

信はタバコを吸いながら云う。もともと、どこことなく仙人めいた、物に動じないやつだったが、インドに入れこんで何回も行ったたり来たりしているうちに、いよいよ仙人めいてきて、いまやほとんど伊集院大介とさえ対抗できそうだ。

「で、お前、もうそれ、解いたわけ？」

「解いちまってるや、こうまで悶々もんもんとはしやしないよ。

むろん、いくつかの可能性は思いつくけどさ——はつきりいって、伊集院大介にだって、まだズバリ犯人を指摘できるだけのデータは、そろってないと思ふんだけどなあ」

「だらうな。さいごのなんか、きのうの今日だろ」

信は体が楽なようにすわり直した。

「そうかんたんにホシが割れるもんなら、お巡りはいらんだらう。そうだろ」

「そうそう。特に、しかし、さいごの藤波女史殺しは特別だ、と思うんだけどね」

「特別って？」

「つまり、あれは、犯人にとっては、予定外の殺しだったんじゃないか、とぼくは思ってるわけ」

「予定外ね」

「そう。いかに凶悪な犯人でも、あと何分か、何十分だからで警察がやってくる、というタイミングをえらんでは殺人なんてしないと思うよ。もしせずにすめばさ。——それにもかかわらず、それだけの危険をおかしてあえて女史を殺したということは、犯人には、それだけの理由、切羽つまった理由があつたということじゃない？」

「だろうな」

「どうしても、警察がきてからじゃおそすぎるとい

——何だと思う？」

「まア、警察に何かしゃべられちゃうから、口封じをせにゃならんとか、そういうことだな」

「そう。それで、思い出したのが、女史がパーティーのと

きに酔っ払ってね——」

（よろしいですか。わたくしは、この連続殺人事件の謎を、みごと、といたのですよ。ああ、思いもよらぬ犯人！ おどろくべきトリック！ 私、ちゃんと、ときましたよ。何もかも、わかったのよ！）

あの声はかなりでかかった。たぶん、パーティーの客全員にきこえただろう。

もし、その中に犯人がいたら、脅威を感じたのだろうか？

「しかし、そいつは、少しうけあえないね。だって女史は、とんでもねえ見当ちがいを考えていたかもしれないわけヨ。それを、たしかめもせずに、そんなどたん場で殺すかね、いかに女史の推理力を信じてたとしても？」

「そう、そいつはちよつとね。それに、女史がそういつてたのは、はじめの二つのことで、あとの二つにも、同じ犯人が適用できるのかどうかはわからんわけだし。むしろ、あとの二つ——三つだけど——がおこったから、女史の考えがまちがってたことがわかる可能性もおおい

にあるわけだろ。とすると、ぼくとしては、むしろ女史の推理じゃなく、女史の知ってたこと——あるいは女史が見たり、きいたりしてたこと、女史がそのことの大きな意味に気づいていたかどうかはともかくとしてだが、ともかくこの事件のキーになるものか人かことがらを、知ってしまったか、見たか、きいたかした——そのために、ああいうことになったんだと思うな。あるいは、それは、犯人だけにしかわからないことだったかもしれないし」

「しかし、よく、それだけ変ちくりんな人間ばかり集まっただもんだな」

「感心したように、信は云った。

「それだけヘンなやつばかりいて、それだけ入りくんでりゃ、たしかに殺しの五つや六つおこったっておかしかないわな」

「そうなんだよね。それに、これは、たぶん見かけほど単純な動機や手口じゃないと思う。はじめは浮浪者仲間^{ぶろうしや}の仕返しとか、広志がみゆきを強姦^{ごうかん}しようとしてとか警

察はいつてたけど、一つ一つはもつともらしいけど、同じ家で、たった五日かそこらのあいだに、そんなことが五回もたてつづけにたがいにかわりなくおこる、なんて考えられるのは五十嵐さんくらいなものだよ。こうなると、はじめの二つからしてちゃんと見直していかないと」

「ふん、ややこしいな」

「そう、中でもややこしいのが人の出入りでね。これは、わかりやすく表にした方がいいと思うな」

「ぼくは一枚の紙をとり出して、いちばん上に「第一の殺人」と書いた。

「第一の殺人・浮浪者殺し——在宅は藤波女史、村崎、佐野、日美子、うらら、麻衣子。

第二の殺人・暴走族殺し——在宅は佐野。女史、村崎、日美子、うらら、麻衣子、朝吹、夏木、風見、栗本——食事へ。

第三の殺人・みゆき殺し——女史、村崎、日美子、一条、宗像、伊集院、森、栗本——二階。佐野、朝吹——

台所。広志——コテージ。麻衣子、うらら——東京。

第四の殺人・夏木殺し。前と同じ。

第五の殺人・藤波女史殺し——村崎、朝吹——警察へ
いて不在。伊集院、森、広志——八畳。一条、宗像、
日美子、栗本——応接間。佐野——女史をねかしつけて
から台所に。麻衣子、うらら——東京」

「ばかばかしい」

このリストを、じろじろ見てから、信はにべもなく云
った。

「これだと、どうしたって、犯人はその、佐野とかいう
家政婦のバーサンだ、ということになるぞ」

「さもなけりゃ、全然これ以外の人間か、ね。——きの
うまでのとりしらべでわかったんだが、宗像も一条も、
パーティにくる前まで目一杯仕事があつて、一秒と一人
でいた時間なんかない。麻衣子もだ。何せ、仕事がTV
だのインタビューだの、人に見られる仕事だから、あい
まをぬって軽井沢へ往復しているひまなんかない。うら
らもずっと麻衣子にくつついてTV局にいるところを、

それこそ局中の人間に見られてる。この四人の軽井沢外
のアリバイに関しては、どこにもおかしいところはない
よ。ついでにいうなら、このアリバイくずしは相当な難
題だと思うな。第二の殺人のみんなで食事してたとき
も、第三、第四の、降霊会のとときも、第五のとときも、ぼ
くはこの目でみてる。ん——そういえば、食事してたとき、
さいごにぼくと麻衣子をのこして、みんな買物や、
夏木たちを駅におくるので出てちまつたけど、それも
別荘へ往復して人一人殺してくるほどの時間じゃない
し、第一、じつさいの殺人はもつと早くに、ちやうどわ
れわれの食事のまつ最中くらいに行なわれたようだから
ね。ふん、こりゃいいよ、ホエンダニットになつてき
たぞ」

こう、ぼくがいった理由を知りたい人は、「ぼくらの
気持」という、ぼくの二番目の長編を読んでみてほし
い。

「とにかく、五つの殺人を通じて家にいたのは佐野さん
一人で、その次にチャンスの多かったのは——ま、ぼく

だね。日美子ママもずっといたけど、降霊会するときなんか、あれだけの人数とひっきりなしにしゃべりながらじゃ——もつとも幽体離脱ゆうたいりだつでもしたってんなら——」

「さもなきや女史だな。さいごのは覚悟の自殺で」

「まーね。食事と、降霊会を、公衆の面前（みたいなものだ）でごまかす方法さえわかれば、一気に、女史、村崎、日美子が一応の候補になるね。うらら、麻衣子には三、四、五の殺人はとにかく絶対できないし、反対に一条、宗像には一、二が、朝吹には一と五ができない。しかし、村崎には五ができないし、日美子は三、四がちとムリだろう」

「何だ。じゃ犯人は、いないか、全部一つずつちがうやつか、だな」

「さもなきや、このぼくか、だよ」

「山科さんあたり、そう思うかもヨ。笑い話じゃないのヨ」

「わーってるって。だから、落ちこんでるんでしょうが。——あと、これでアライ関係の整理はいったんす

んだとして、注目すべき疑問点をあげてみるよ。

まず、①は、動機だな。この五連続殺人事件のいちばんの特徴って、ぼく思うに、動機がありそでなさそで——ちつともはつきりしないことだよ。いや、たいてい、動機がそうはつきりしちや、犯人は一発だけど、これにね。浮浪者、ジロ、夏木、みゆき、女史——この五人に、一体何の共通点がある？」

「そこにいたことヨ」

言下に信が云った。

ぼくは、何秒か、まじまじと信をみていた。

「ジャック・ポッド」

ややあつて、ぼくは云った。

「それ。ロン」

「何だ、そんなの。イヌにだってわかる」

「じゃ、ぼくはイヌ以下の知能だってことかよ。——そうかもな。そういう気がしてきた」

「まあまあ。とにかく、そこにいた他のやつは生きてんだからさ。先行ってヨ」